

# 暴力の連鎖を終わらせる<sup>1</sup>

ジャン・バニエの話

オースティン・アイバリー

(翻訳＝浅野幸治)

世の中で弱者が受け入れられたときに初めて平和は訪れる、とラルシュの創始者ジャン・バニエは語ります<sup>2</sup>。その考えについて話を聞くために、オースティン・アイバリーがバニエに会ってきました<sup>3</sup>。以下は、アイバリーの報告です。

## ラルシュへの道

現代における平和の預言者ジャン・バニエに会うために先週私が英仏海峡を列車で渡ったとき、世界は脅威におののきました。私の乗った列車がトンネルの入り口で三時間も止まったからです——しかも、二日前にマドリッドで爆破事件があって、新聞はロンドン・パリ間の列車が次の標的になるかもしれないと報じていました。幸いにも、線路が故障しただけで、車掌によれば「安全に影響はない」とのことでした。

パリからコンピエーニュまで列車で一時間、そこからさらに車で霧のかかった森の中を十五分ほど行くとトロリーという小さな村に着きました。そして直ぐに私はとても深い安らぎにつつまれました。この村では、障害をもった人が、人間であることの意味を私たちに明かしてくれています——この村は、恐れと報復に沈みつつある世界に対して、希望を語るができるでしょうか。

## バニエに会う

私はジャン・バニエに彼の小さな家で会いました——バニエは私をにこやかに迎え入れて、田舎風のスープを暖めてくれました。バニエは背が高く、少し貴族のような風格があって、彼の上流階級の英語も母音がフランス語風なので柔らかく聞こ

えます。しかし、ラルシュを創始した、七五歳<sup>4</sup>になるバニエと会って一番印象的なのは、彼の顔です。顔の皺には、驚くべき物語が隠されています。故カナダ総督（ジョルジュ・バニエ）の子息であるジャン・バニエは、平和と自由のために闘うべく、一九四二年に英国海軍に入りました。八年後には、同じ目的のために別の働き方をするべく海軍を辞めました——それは「精神を深め、神の御心からあふれる愛をとおして、争いの原因とその解決方法を理解する」ことだったとバニエは小著『暴力とゆるし』の中で語っています<sup>5</sup>。

バニエの人生にとって最大の転機は、一九六四年にやってきました——その年バニエは、尊敬する師であるドミニコ会のトマ神父の誘いに応じて、カナダでの哲学講師としての生活を棄て、トロリーで二人の障害者と暮らし始めたのです。最初「かわいそうな人たちの面倒を見る、心の広いカトリックの人」であったバニエは徐々に、障害をもつ人たちと生きるなかで、自分がこれまでの人生で決して経験したことのない喜びや幸せを感じていること、それが神からの贈りものであることに気がつきました。バニエがこの経験について話したり書いたりしはじめると、多くの人々がトロリーにやってくるようになり、ラルシュは飛躍的に発展し始めました。今では世界の二九カ国に一二〇以上のラルシュ共同体（それぞれがいくつかの家をもっている）があります——ラルシュとならんで「信仰と光」という運動もあり、そこではラルシュの経験を生かして、障害者の家族が互いに支え合っています。

## ラルシュの経験

経験というのが鍵です。バニエは経験について何度も書いていますが、まだそれを表す神学といったものはありません。バニエはこう言います。「私たちの拠り所は経験であって、知的な信念や宗教的な教条ではありません——だから私たちは非常に脆いのです。ラルシュはひよっとしたら二〇年後には存在していないかもしれません。しかし、その脆さこそが私たちの強みであるかもしれません。」

「仲間」つまり障害者の世話をし、時には彼らの怒りや攻撃をも受けることが、ラルシュでの日常生活の実際です——そしてそれが、心が生まれ変わる素（材料）になるのです。その経験について考えることを通して、結果的にバニエは「戦いの世界に細々と現れ続ける平和の使徒」の一人になりました。バニエは、この細々とした伝統を、まだ名前がなくして神学的に表現されていないけれど、抑圧された人たちや除け者にされた人たち、蔑まれた人たちと心を通わせる経験を共有している「ある種の運動」と述べています。その経験をした人たちは、世界における神の愛や罪を贖い心を癒すキリストの力を——言葉にされていようといまいと——直接に感じることができました。

## もう一つの道

その経験は、反戦というよりもむしろ非暴力に向かいます。かつて海軍士官だったバニエは、警察や刑務所だけではなくて正規の軍隊や軍事介入も必要であることは承知しています。バニエによれば、「問題は、いかに辛抱強く、今日の世界への聖霊の語りかけに耳を傾けるかです——言い換えると、（平和を実現する）別の方法があるかどうかと問えるようになることなのです。」

ラルシュで学んだ別の方法とは、お互いに相手を受け入れることを通して心を生まれ変わらせる方法です。平和は、心の交わりを通じたこの心の生まれ変わりにかかっています。心を通わせるために決定的に重要なことは、強い者が弱い者から学ぶことです。バニエは、二〇〇四年一月にローマ教皇が述べた挨拶<sup>6</sup>を指摘します。その中で教皇は障害者のことを「人類の特別な証人」と述べました——つまり生まれ変わった世界、もはや力や暴力や攻撃ではなくて愛や連帯や好意がみなぎっているような世界の使者であると述べました。教皇によれば、障害をもつ人たちは私たちに「人間であることの意味を明かしてくれるからです。」

教皇がそのような挨拶をしたのは、ラルシュの経験を参考にしていると考えられます。しかしバニエは、その挨拶の背後には教皇ご自身の弱さの経験も秘められて

いると見えています。

ヨハネ・パウロ二世の在位期間は史上二番目に長くなっているのに、教皇に対して引退を求める人たちもいますが、バニエは違います。「そのように傷つきやすい人が教会の頂点にいるのは、素晴らしいことだと思います」とバニエは言います。傷つきやすさや貧しさを受け入れることが、ラルシュにとって霊性を深める道だからです。

普通の健常者の生き方——独力で自分の価値を証明するために地位や業績を上げること——は、重度の障害をもった人にはできません。「重度の障害をもった人が生きて、満たされるためには、人間関係が必要です——気前のよい行動よりも、心のつながりが必要なのです」とバニエは言います。

この二つにはバニエによれば重要な違いがあります。気前がよいとは価値のあることですが、それは上の者が下の者になにかを与えることです——他方、心のつながりには、心の向きを変えて自分をさらけ出すことが必要です。バニエの経験では、障害をもった人には、「私たちに心のつながりを結ばせてくれる」特別な才能があります。

## 平和のために

バニエは、ラルシュの経験から平和の教訓を引きだします。平和とは静的な状態ではなく、たんに暴力がないということではありません——人々が互いに孤立し引き離されて無関心な場合、衝突はいつでも起こりえます。また、たとえ礼儀正しく法律が守られていたとしても、人々を分け隔てる壁がしっかりと残っているならば、やはり平和ではありません。平和とはむしろ、競争や敵対、力の衝突に対抗する積極的な動きです。バニエによれば、暴力の連鎖が断ち切られ、社会の中で弱い者が完全に受け入れられ、愛され、尊重されたときに初めて、平和は訪れるのです。そういう心の生まれ変わりを、善いサマリア人の話にでてくる、追いはぎに襲われた人は経験しました<sup>7</sup>。その人は何よりもまずサマリア人がしてくれたこと

に、そしてその優しさに心を動かされ、最後に驚きと喜びにつつまれました。バニエによれば、「その人が目を覚まし、自分が敵に助けてもらったことを知って、『ありがとうございます。お願いですから、どうか友だちになってください』と言うとき、その人の心になにかが起こったのです。」

社会や宗教の共通性よりも強くて深い、人間のこの共通性を見いだしたときに、平和は可能になります。バニエの考えでは、宗教間の対話がほとんどの場合に何の成果も上げられないのは、神学や霊性の話——信仰体系の比較——から始めるからです。「そうすると『イエスとモハメッドは同じなのか』と問うことになります。同じだと言うか、同じでないと言うか、どちらかしかありません。そうではなくて『人間であることにはどういう意味があり、人間はどのように成長するのか。自由とは何であり、人間として成熟するとはどういうことなのか』といったことを一緒に考えたほうがよいのです。」バニエによれば、宗教的信念の問題は、共通の人間性を見いだしてお互いを受け入れた後で、論じることができるからです。

言い換えると、平和の出発点は人間的関係——つまり信頼に支えられた誠実で長期的な関係にあります。そのような関係は、今日では難しいようだと言います——関係がもはや法や社会的制裁によって縛られていないからです。そのような人間関係は、今日では心のきずなを結べるかどうかにかかっているようで、ずっと弱いように思われます。同じく、新たに多元的になった社会では、ほんの数年前までは決して肩を触れあわせることがなかったような人たちを混ぜ合わせています。バニエによれば、今がふんばり時です。「心のきずなを結べるか——その場合には新しい力が生まれます——あるいは崩壊してしまうかだ」とバニエは言います。その新しい力が生まれるかどうかは、まず内面にある宗教を見だし、共通の人間性の認識に支えられた霊性を見いだせるかどうかにかかっています。

## ラルシュ

そういうことがラルシュでは起こっています——障害をもつ人との関係を通して

まったく新しい人生観に目を開かれるのです。この心の生まれ変わり、目覚めこそが最も重要なことです。バニエはこう言います。「もし善良なカトリック信者が障害者を除け者にし、無宗教の人が他人の障害に本当に心が行き届くならば、無宗教の人のほうがましです。」誰でも「自分の心の深みに入っていき」さえすれば、「聖書の根本は心であり愛であること」が分かります——そして「イエスは人々に名をなめることなく現れてくるのです。」まず最初にこの経験——誰にでも可能な——愛と光と喜びの経験が来ます。「その後で初めて、言葉にして考えることもできるわけです。」

この風通しのよさの故に、過去にはバチカン（教皇庁）との間に軋轢が生じたこともありました——あるときバニエは、ラルシュがカトリックの組織であるのか否かはつきりさせるように求められました。バニエはどちらとも言えませんでした——ラルシュの中には、障害をもった人にも、もたない人にも、カトリックだけではなくて、イスラム教の人にもヒンズー教の人にも無宗教の人にもいます。（家の責任者になっているイスラム教の人もいるので、イスラム教の人が将来ラルシュ共同体の代表者になることも理論的にはありえます。）教皇庁信徒評議会との問題は——バジル・ヒューム枢機卿の助力によって——バニエにとって好ましい仕方で克服されました。教皇庁とカンタベリー大司教と主にプロテスタントの世界教会協議会のそれぞれがラルシュの代理人を選定しました。そして代理人たちとバニエは、昨年（二〇〇三年）ローマで教皇庁の信徒評議会、キリスト教一致推進評議会、諸宗教対話評議会の各議長と話し合いをもちました。その結果ラルシュは、カトリックに留まりカトリック教会の支援を受けながら同時に教会の枠にとらわれなくて活動することができるようになりました。

## 夕べ

私は、ジャン・バニエに会った日の夕べ、彼と一緒に、重度の——高度の自閉性があり言葉も話せない——障害をもつ人たちが暮らす「森の家」に行きました。主

にフランス人のアシスタントたちは若く教育があり快活でした——夕食のとき彼らは、障害をもつ人が食べ物や飲み物が欲しいのか欲しくないのかを読み取りながら、やさしく世話をしていました。それは大家族の場合のように楽しくにぎやかな光景でした。ですが、私には気になる人が一人いました——ロイは平静ではなくなにかに怒っている様子で、食べ物を口に入れたかと思うと、また少しずつ口から出すのです。目は定まらず、時々うめき声を発します。私の気持ちは、嫌悪と憐れみの間で揺れ動きました。

夕食後、みんなで円く座ってお祈りをしました。歌も少しありましたが、ほとんどは沈黙の祈りです。静かな瞑想の一時でした。バニエはロイを招いて自分の膝の上に座らせました。それから半時間余りの間に、ロイは徐々に落ち着いてきました。最後にロイはバニエの胸に顔を沈めました——その顔は安らかな笑顔になっていました。バニエとロイは一言も言葉を交わしませんでした。二人の心は深いところで通じ合っていました。

その光景は、平和のあり方について雄弁に物語っていました——バニエの優れた著作全部にも負けないくらい雄弁にです。私は、獅子が子羊と一緒に安らぐというのが単なる願望ではなくて、現実に可能なことだという確信をもって、トローリーを後にしました。世界が違って見えました。列車も、爆弾に見舞われることなく、順調に走ってくれました。

## 訳注

- 1 本稿は、『The Tablet』誌二〇〇四年三月二〇日号に掲載された「Ending a chain of violence」を訳したものである。なお、本文中の小見出しは訳者がつけた。
- 2 バニエとラルシュについては、既に『福音と世界』でも紹介してきた。「ジャン・バニエ略伝 上・下」（『福音と世界』二〇〇六年五月号五九～六六頁、六月号五六～六一頁）および「ジャン・バニエに聞く」（『福音と世界』二〇〇七年一月号五六～六一頁）を参照。
- 3 二〇〇四年三月一三日のことである。
- 4 アイバリーの報告の時点では七五歳であったバニエも、二〇〇七年十二月現在は七九歳である。
- 5 ジャン・ヴァニエ（原田葉子訳）『暴力とゆるし』女子パウロ会、二〇〇五年、九頁。
- 6 二〇〇四年一月にローマで開催された「知的障害者の尊厳と権利に関する国際会議」に

において、教皇が参加者に述べた挨拶である。  
7 ルカによる福音書一〇章二五～三七節

(あさの・こうじ 豊田工業大学准教授)

(付記 本翻訳は、新教出版社『福音と世界』2008年2月号、37～41頁で発表したものである。)